

殿村遺跡の発掘

第7次発掘調査・平成27年9月・松本市教育委員会

1 殿村遺跡とは？

平成20年に学校建設計画より事前の発掘が行われ、室町時代～戦国時代（約400～500年前）の大規模な造成跡が見つかりました。

東西80m近い広大な造成面（平場）からは、石積みや建物の礎石・柱穴、塀の基礎などの遺構が見つかりました。

遺構の内外から、中国産の高級な陶磁器や茶道具（茶碗・茶入れ・茶壺・風炉・茶臼）、地元産の素焼き土器の皿や鍋、文房具の硯、石臼、下駄や漆器、まじないの道具などが大量に見つかりました。

こうした大規模な造成や高級な遺物をともなう中世の遺跡は、武士の館跡や寺院などに限られます。したがって殿村遺跡は庶民が暮らした村ではなく、権力者や特定の勢力が多くの労働力と資金を投入して活動をおこなった場だったこととなります。

これまでの調査から、造成跡は南北東西300mの範囲にひな段状にいくつも連なり、想像以上に大規模な遺跡であることがわかってきました。また、遺跡と重なるように長安寺、補陀寺、畷ヶ寺など、中世の古文書に登場する古い寺院が存在しており、遺構や遺物の内容からみて、これらの寺に関係する施設が姿をあらわした可能性が高いと推定されます。

一方、「殿村」の地には、中世に会田盆地を治めた会田氏の館があったと伝えられており、遺跡と会田氏の関係も注目されます。

2 今回の発掘の目的は？

保存が決まった殿村遺跡を将来に受け継ぐためには、遺跡をどのように保存し活用していくのか、その方法を考える必要があります。その一歩として、まずは遺跡の内容について詳しく知る必要があります。

遺跡の構造は？広がりや？なぜここで造成が行われたのか？誰がつくったのか？などの点を明らかにするため、平成22年から8年間、遺跡の広い範囲で確認のための発掘調査を実施し、あわせて地域に眠る古文書や石造物などの資料を掘りおこして、会田を中心とする虚空蔵山麓の歴史を人々の暮らしをさぐることとなりました。

今回は、以下の目的のもと、2カ所で発掘を実施しています。

- ① 長安寺本堂跡付近の成り立ちが中世までさかのぼるのかを探る（7E1トレンチ）
- ② 1次調査地（旧会田中校庭）に広がる平場跡南西部の状況をさぐる（7A1トレンチ）

3 今回の発掘のおもな成果は？

(1) 長安寺本堂跡の造成は中世にさかのぼることがわかった

江戸時代の長安寺の姿は『善光寺道名所図会』に見えますが、それ以前、中世にはここに

お寺が存在していたのでしょうか？

発掘の結果、江戸時代のお堂の下に、室町時代の造成跡（平場）が広がっていることがわかりました。室町時代の平場は、江戸時代よりも奥行きがせまかったこともわかりました。

平場は、尾根の先にある小さな谷を切り開いて造成しているため、背後は崖になっています。また、平場は固くたたきしめた盛り土で造成されています。

平場の奥まった場所には礎石建ちの小さな建物があり、その南から東には周囲には何らかの目的で火を焚いた炉の跡がいくつか見られます。

また、建物跡の西側には縞目の美しい岩盤を掘りぬいてつくった池の跡があります。水を湛えていたかどうかはわかりませんが、屈曲する岸に石積みや黒い玉石を敷いた部分などが見られることから、庭池と推定されます。また、南西寄りの池底近くには銅鏡（和鏡）が鏡面を下にして置かれており、何らかの宗教的な行為を思わせます。

遺物は、素焼き土器の皿や鍋などの生活用具がほとんど見られない反面、瀬戸産の天目茶碗や中国産と思われる茶入れなどの茶道具や中国産の高級な大皿、文房具の硯の出土が目立ち、この場所に重要な施設が存在したことを示しています。

おそらく、江戸時代のお堂に先だって、この場所には庭池をともなう小さなお堂のような建物が建っていたのではないかと想像され、長安寺の成り立ちや殿村遺跡との関係を考えるうえで、非常に重要な成果をもたらしたと言えるでしょう。

(2) 1次調査で見つかった平場の南西部の様子が見えてきた

平成20年に見つかった石積みの南側がどのような構造になっているのか？今回はその3回目の確認調査として、グラウンドの南西側の土手下で発掘を行っています（現在進行中）。

その結果、石積みを埋め立てて平場を拡張した2面段階（15世紀末～16世紀）に、平場の縁を区切った柵または塀の跡と考えられる柱穴の列や溝、1間四方の小さな礎石建物跡、平場のすそに設けられた土止めの石列などがみつかりました。

石積みが存在していた3・4面段階（15世紀）は現在確認中です。

5 殿村遺跡第7次発掘調査データ

(1) 調査期間・調査面積

5月18日～10月末（予定） 160㎡

(2) 7E1トレンチ（130㎡）

発見遺構 造成跡、建物の礎石・柱穴、炉跡、池跡など（いずれも中世）

出土遺物 地元産の土器（皿・鍋）、瓦質の土器（火鉢）、瀬戸産の陶器（天目茶碗・大皿など）、中国産の陶磁器（陶器の茶入れ、青磁の大皿・香炉）、石製の硯、銅製の鏡（和鏡）・銭（中国からの輸入銭）・・・いずれも中世

(3) 7A1トレンチ（30㎡）

発見遺構 造成跡、建物の礎石・柱穴、柵または塀の柱穴、土坑（用途不明の穴）、石列・石積み（土止めなど）、土塁（土手）ほか（いずれも中世）

出土遺物 縄文時代の石器（矢じりなど）、古代の土器（土師器・須恵器）、中世の遺物

・・・地元産の土器（皿・鍋）、瓦質の土器（茶道具の風炉）、常滑産の陶器（カメ）、瀬戸産の陶器（天目茶碗・すり鉢など）、中国産の陶磁器（青磁の皿・碗、白磁の皿・碗）、硯・石臼、鉄製品など

廣田寺

字系げ
(系げ寺)



柵・土坑など中世の遺構



石積みのある中世造成跡と建物跡

今回調査地(7A1)



1次調査区の遺構群(東から)



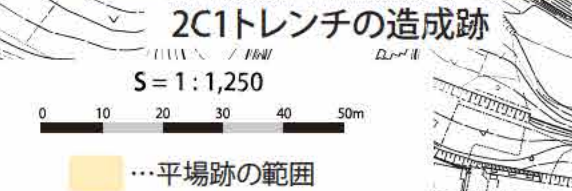
平場跡
(長安寺に係るお堂跡?)
・建物跡・炉跡・池跡
・茶道具(天目茶碗・茶入)
・青磁・古瀬戸・銭・硯など



1次調査で見つかった平場跡の続きを確認

- ・礎石建物跡
- ・柵または塀跡
- ・溝
- ・石列
- ・石積み
- ・青磁、白磁、青花、古瀬戸など

殿村遺跡これまでの発掘地点と平場跡
(現地説明会案内図)





▲江戸時代の長安寺（『信濃宝鑑』）
2年前取り壊された本堂が描かれている。
景観は数百年あまり変わっていないが、
中世のお堂はもう少し小さかった？



▲和鏡が見つかった様子
岸近くの池底に鏡面を下に向けて置かれていた。



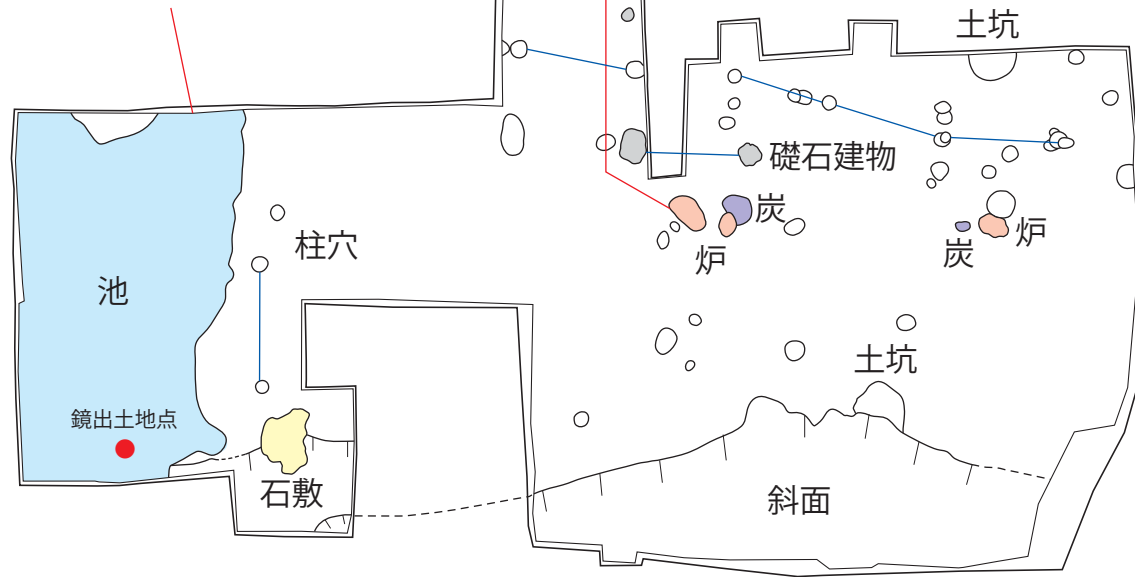
◀和鏡
擬漢式鏡と呼ばれる形式で、
室町時代の作。錆（さび）の
間から流水を描いた文様や
亀をあしらった鈕（ちゆう）
が見られる。



▲発掘調査地全体の様子
小さな谷を造成した平場から、
建物の礎石・柱穴や池などが見つかった。



▲岩盤を掘ってつくられた池の跡
庭池か。岸は石で護岸され、
黒い玉石を敷いた部分もある。



▼炉跡
何を焚いたのか？
炭や焼け土が見られる



茶道具①
中国産とみられる茶入
大海茶入と呼ばれる形
非常に高価な品である



青磁の大皿
(中国産・非常に高価な品物)



茶道具② 瀬戸産の天目茶碗



線刻のある硯



瀬戸産の大皿



スタンプ文様の美しい火鉢



▲調査区全体の様子
東西に走る溝と、それに沿って並ぶ柱の穴が見られる。



7E1 トレンチ

7A1 トレンチ

調査区南で見つかった石列 ▶



▲庭池のある中世の寺院跡（広島県万徳院跡）

